大正ロマンの生んだフェミニスト： 山田わか・嘉吉の協働と思想（その6）

斎藤 理香

はじめに

1930年代は、日本が欧米列強に激しく対抗しながらも、近隣アジア諸国を侵略の対象とする、帝国主義・軍国主義がにわかに本格化していった時代である。そういう暗い時代を背景に、フェミニズム運動—当時の呼び名で婦人運動—は、一歩ずつ確実に、女性の生活改善・地位向上という、女性たちにとって「明るい」未来に向かって歩を進めていた。山田わか（1879-1957）が、母性保護の法制化をめざす活動と社会事業実践に取り組むのも1930年代を通じてであった。

夫でもあり師でもある山田嘉吉（1865-1934）が病に倒れ、家計の責任を背負うことになった1927年以降、わか執筆・講演活動に加え、地域・社会活動にも積極的に取り組むようになる。たとえば、「東京連合婦人会」の副委員長に就任するのが1930年。「東京連合婦人会」とは、元々1923年の関東大震災の救援活動で集まった婦人団体を組織化したもので、その後まもなく、この会の政治部で活躍した久布白落実（1882-1972）と市川房枝（1893-1981）を中心に、婦人参政権を訴える「婦選獲得同盟」が作られた。1931年5月からは『朝日新聞』のコラム「女性相談」の回答者になり、「社会事業実践としての女性相談」に取り組むことになる（斎藤2012：128）。その後、嘉吉が1934年に亡くなった時は、後の「母性保護連盟」（以下、「連盟」）に葬儀の香典返し500円を寄付し、他の委員から推されて委員長を務めることに。また、1935年には、「母を護るの会」を立ち上げ、貧しい母子の自立支援のための廃品回収業を始める。そして「連盟」の下で「母子保護法」制定をめざす運動が促進され、1937年3月に法律として成立するに至った。

1937年は、わかにとって節目となるような出来事が続いた。まず2月、6年間にわたり担当した朝日新聞「女性相談」の回答者を降板する。3月、前

述したように、わかが委員長を務めた「連盟」の働きによって「母子保護法」が成立。そして10月、雑誌『主婦之友』の婦人使節として、アメリカを横断しながらの5カ月間の講演旅行に出かけ、帰国後の翌年から主婦の友社の女性相談室に活躍の場所を移したのだった。

今回は、その1937年の「主婦之友社遣米大使」としてのわかの足跡、それも訪問先アメリカの日系社会での歓迎ぶりを、現地の新聞記事を通して紹介し、わかが果たしたこの時代の婦人使節としての役割と意味を考察する。そして、「反省的女性史」（上野 1998）によって、平塚らいてう（1868-1971）、市川房枝など当時の多くのフェミニスト同様、わかが愛国主義に取り込まれたことを批判的に検証した上で、彼女の戦前と戦後のフェミニストとしての位置づけについて考えてみたい。

1. わかと『主婦之友』

わかには、1913年に雑誌『青鞥』に初めて翻訳を発表して以来、エレン・ケイなどの翻訳の連載、評論、小説などを発表、その後も平塚らいてう、与謝野晶子（1878-1942）、山川菊栄（1890-1980）らが意見を戦わせた「母性主義論争」（1918-1919）に参加するなど、1910年代後半に評論家として頭角を現しはじめ、1920年には個人誌『婦人と新社会』を発刊、母性保護評論家としての地位を固めていった。そんなわかの活躍の陰には、夫でもあり師でもある嘉吉の存在があった。わか・嘉吉夫妻が出会ったのは、1903年か1904年頃のサンフランシスコで、当時わかにはキャメロンハウスという長老派教会によるアジア女性のための救済施設におり、そこから嘉吉の運営する語学塾に通い、読み書きを学んだのだった。わか渡米したのは、不幸にも人身売買の罠に陥ったからで、1890年代終わり頃「日本人醜業婦の巢窟」（竹内 1994 [1929] : 482）とも言われたシアトルに送られ、数年後にサンフランシスコに逃れ、キャメロンハウスに逃げ入ったとされている⁽¹⁾。

さて、嘉吉と結婚し、1906年のサンフランシスコ大地震を機に2人で日本に帰国して以来、実に31年ぶりの再訪となったわかのアメリカ行きをお膳立てしたのは、主婦之友社・社長、石川武美（1887-1961）である。1937年2

のために尽すと共に、在米同胞の慰問をしようとするのである。一雑誌の計画として重荷に過ぎるが、この非常時に際して多少なりとも、国家のためにつくし得れば何よりである。

ここでいう「支那事変」とは、1937年7月7日に勃発した盧溝橋事件をさしていると思われる（現在では、支那事変とは1937年7月7日から太平洋戦争勃発までの1941年12月8日までの期間をさすという見解が一般的）。が、日本はこれ以前から、「満州国」建設などで国際的な非難を浴びていた。そんな中で日米親善のための米国訪問をだれに託すのか、その人選は容易ではなかったろう。しかし石川は、「米国の与論は婦人の力で左右されることが多い」ゆえ、その説得にあたらせるために女性使節を送る必要があると言い切っている。

以下、わかのことから話がそれるが、石川武美と『主婦之友』についても少し説明を加えておきたい。大分県の農家に生まれた石川は、旧制中学を中退して上京し、1896年創業の同文館（現在の同文館出版）に勤めた。そして『婦人友』(1908年創刊)や『婦女界』(1910年創刊)などの女性雑誌の刊行にかかわっている。1916年には会社を辞め、東京家政研究会を立ち上げ、そこから翌年『主婦之友』を創刊する。そして上記2誌や『婦人画報』『婦人公論』など既存の女性誌を横目に、『主婦之友』をわずか3年で発行部数1位に成長させた。また石川は上京した頃に、神道のキリスト教で知られる海老名弾正(1956-1937)の本郷教会に熱心に通い、洗礼を受けるとともに、国粹主義的な思想にも大いに影響された⁽⁸⁾。石川のこのような経歴を見ると、彼がわかちに信頼を寄せ、親善使節の大役を委ねたのもうなずけよう。わかちがアメリカにいたこと、かの地でキリスト教の洗礼を受けていること、母子保護法の推進者であり、産児制限に反対であることなど、どれをとっても、石川との思想的な親和性がみてとれる。

さて、当時の『主婦之友』の読者は日本国内にとどまらなかった。外地でも日本人家庭のある「満州国」をはじめ、移民のいる地域ならどこでも、したがってアメリカにも熱心な読者がいた。後述するように、遣米使節となっ

たわかは、アメリカ各地の日系人コミュニティから大歓迎されるのだが、それは単にわかが日本で有名な女流評論家だからだけではない。『主婦之友』の記事で多くの読者に既に馴染みになっていたからである。誌面でいつも身近に感じてきた「山田女史」が、はるか海を越えて自分たちに会いに来る。距離のある分、読者の興奮度は増幅されるといえよう。そんな読者をターゲットとした新聞広告も日系新聞に掲載されている。たとえば、シアトル発行の『大北日報』^{たいほく}には『主婦之友』1937年11月号についての3段抜き広告があり、その中の見出し文は以下のとおりである（以下、新聞記事中の旧漢字は新漢字で表記）。

「アメリカ在住の皆様のために遣米婦人使節・山田わか女史特派」

「これが日本の母の心だ！！これさえ聞いたら安心できる！！」（『大北日報』1937年11月6日第7面）

この見出しは、主婦之社が特定地域、つまり新聞に広告の載ったアメリカの読者に向けた「生の声」だと言える。「日本の母」という言葉は、この時期、戦地に赴く人のだれの胸にも強く響いたであろうが、異国で暮らす者には、老若男女を問わず、ことさら強く訴えかけてきたに違いない。「これさえ聞いたら安心できる」というキャッチも、在外同胞が戦争状態にある故国の状況を憂えている心境をつかみとり、励ますセリフとなっている。一方で、こういった文言は大衆誌的な売らんがための宣伝文句で、情緒的かつ煽情的にすぎるともいえる。また、同じ11月号についての新聞広告の見出しには「吉屋信子女史 上海へ飛ぶ」も見られる。吉屋信子（1896-1973）も、同じく「主婦之友特派」で、わか「遣米婦人使節」に対し、こちらは「皇軍慰問使」とある。吉屋が上海に派遣されるのも、その役割名どおり慰問のためだろうが、現地の読者サービスさらには新たな読者開拓という目的もあったのではないと思われる。石川が『編輯日誌』で「『主婦之友』が朝鮮婦人や台湾婦人の間に、新しい読者をどしどし増し加えつつあり、「この勢いで、「満州国」婦人や中華民国婦人の間にも、広く読まれるようになりたいものだ」

と書いているように（石川1980：167）、『主婦之友』は植民地支配下にある人々まで読者に取り込もうという野心を持って作られていたのだろう。

2. アメリカ日系人

遣米使節はまた、日米親善にとどまらず、「在米同胞の慰問」が大きな目的の一つであった。アメリカにあって、故国日本の行動が批判的になっていけば、日系移民が厳しい状況に置かれていることは容易に想像できよう。しかし、在米日系移民は、萎縮するよりも、むしろ故国のために一肌脱ごうという気合に満ちていた。Ichioka（2006：180-181）によると、1937年の盧溝橋事件勃発後、アメリカ西部の在米日本人の間ではただちに緊急事態班が組織され、日本を非難する地元民に対抗して、英語のパンフレットを作成、講演会やラジオ番組などを企画し、日本を擁護するキャンペーンを張った。また、慰問金、生活物資を詰め込んだ慰問袋、千人針などを日本に送るなど、在米日本人の移民ナショナリズムは頂点に達した。

日本を遠く離れても故国への忠誠心を忘れない日系1世は、しかし「第2世問題」を抱えていた。1937年ごろのアメリカ日系人社会は、主に移民の1世と2世で構成されていたが、Ichioka（2006：10）によれば、この頃はアメリカで生まれた日系2世の人口が急激に増加しており、1941年の真珠湾攻撃の前夜までに2世の数が1世を2対1の割合で上回ったという。また、日本に対する愛着の強い1世に比べ、2世には自分たちのルーツが日本にあるという意識はどうしても希薄である。そこで、1世は、2世にどうやって日本について学ばせるかに頭を痛めた。2世に対する日本人アイデンティティの教化、感化は、1937年以降、特に深刻なものとなった。なぜなら日本が戦争をしていても、2世の多くにさほど気にも留めないという態度がみられたからである、とIchiokaは指摘している。

アメリカへの移住が始まった当初、19世紀終わりから20世紀初めにかけては、移民というよりも出稼ぎに行くという感覚で、いつかは日本に帰ることを前提に故国を後にした者が多かった⁽⁹⁾。たとえば、1898年にアメリカ本土には2,039人の日本人移民がおり、その大部分は学生と政治活動家だった

とされる (The Japanese American National Museum 2000)。この中で何人、いつ頃日本に帰国したかについての記録はないが、初めから移民・定住を目的にした者たちではなかったのはたしかである。その後、1924年にアメリカで日本からの移民が禁止されると、在米移民の間では、アメリカで2世を日米の懸け橋とするべく教育するという自覚が生まれ、2世に日本を見聞させる日本ツアーが企画されたり、日本に留学して学校教育を受ける2世も現れた (Ichioka 2006 : 24-36)。日本に留学しないまでも、地元で日本語学校に通う2世もいた。しかし、「第2世問題」として Ichioka (2006 : 47) が指摘するように、1世が期待したほどには、日米の懸け橋としての2世の日本化は進まなかった。逆に、日系2世は英語で教育を受け、アメリカ人としての自覚を持つことには成功した。

このように、アメリカの日系人社会では、彼らの故国における日本人と同様かそれ以上にナショナリスティックな感情を膨らませていた。この場合のナショナリズムは、その対象を1世が日本への、2世はアメリカへのナショナリズムという具合に、日系社会に亀裂をもたらすねじれを含んでいた。

3. アメリカ西部・日系社会への訪問

ここからは、アメリカ西海岸で発行されていた日系の新聞記事を基に、わかアメリカにおける活動を明らかにしていく。遣米使節の成果については、わか自身が『主婦之友』1937年12月号から1938年5月号まで6回にわたり詳しく報じているが、訪問先での反応は地元の新聞報道によく表れている。日系社会に特化した新聞は、ふだんからコミュニティ内の出来事については細大もらさず報じる傾向にあるが、わか滞米中の行動についても、彼女の一挙一動をくまなくとらえ記事にしたといえるほど、多くの記事が連日書かれたのだった。このような記事の書かれ方こそが、地元の熱狂を余すところなく伝えているといえる。

ロサンゼルス市と周辺地域を含んだ南部カリフォルニア (南加)、サンフランシスコ市を中心とした北部カリフォルニア (北加)、さらに北上して西北部と呼ばれるシアトル・ポートランド地域のいずれにも、19世紀末から20

世紀初めごろまでに日系人読者を対象にした日系人によるローカル紙が存在した。今回は、そのうち1937-38年以前から発行されていたサンフランシスコ拠点の『日米新聞』、シアトル拠点の『大北日報』^{たいほく}からいくつかを紹介するが、主婦之友社が、サンフランシスコにある日米新聞社にわか滞米中の訪問日程作りを委託した関係で、『日米新聞』の記事が中心になる。また、今回は紙幅の都合で、わかのカリフォルニアでの活動を報じる記事を紹介するにとどめておく。

わか訪米についての最初の報道は、『日米新聞』1937年10月26日の記事「山田わか女史／龍田丸で渡米／女性の立場―日本紹介／廿七日来桑する」である。シアトルの『大北日報』1937年10月27日にも「桑港発」として、同じ内容の記事が載った。そこには、今回筆者が収集した新聞記事の中でおそらく一番長い、わかについての紹介文が掲載されている。

(桑港発) 故国婦人評論界に於ける第一人者山田わか女史は国民使節一行乗船の龍田丸で渡米し二十七日入港の予定であるが、女史は女性の立場から日本の正しさを一般在留同胞に説明し併せて米人方面にも働きかける筈である。尚女史は在米邦人とは非常に密接の関係あり女史が若かりし頃は沙港及び桑港に在りて非常な苦境に陥り英文学者山田嘉吉氏に救はれ以来山田氏の指導下に刻苦勉強し遂に日本に於ける女流評論家として現代日本の女性指導者となるに至ったものである(『大北日報』1937年10月27日第5面)

引用の4行目「尚女史は」以下には、わかがかつてシアトルとサンフランシスコにいて「非常な苦境に陥」っていたと書かれている。これは、わかシアトルの娼館にいたこと、そこを逃れてサンフランシスコに渡ったが、それでも人身売買の手が伸び、救済施設に逃げ込んだことなどをさしていると思われる。この記事の情報源となったのは、おそらく『米国西北部 日本移民史』であろう。この本は1929年に大北日報社の創業者・竹内幸次郎によって出版され、現在は復刻版(1994)も出ている。これによると、わかシアト

ルにいたのは1902年頃とされ、わかか嘉吉と結婚し日本に帰国、その後評論家として大成したことまでが記されている。わかかのアメリカ時代については、岡繁樹（1878-1959）が発刊する『アメリカ新聞』というタブロイド版の新聞に彼自身が連載した「アラビヤお八重出世物語—山田わか女史の前身」（1938年2月～3月）にも記述がある。こちらのほうは現在、保管先の大学図書館で資料の一部が紛失しており、全文を確認することはできない⁽¹⁰⁾。執筆の年代からみて、日米新聞の記事は、竹内の移民史を参照して書かれた可能性が高い。

日米新聞社はまた、主婦之友社からの遣米使節の受け入れ依頼文をそのまま紙面に載せており、ここにはっきりと使節の目的が謳われている。

（前段略）

私共は祖国の光栄のために協力一致現下の事態を收拾するの決意と用意とを有つてをりますが、在米邦人各位には日本にとって不利な与論と支那人の宣伝中傷の中に、故郷を遠く離れてゐられるだけに種々御不安のことと察しいたしてをります。今般主婦之友社に於ては日本の眞の実情と肚の中を各位に忌憚なくお話申上げ且つ米国人に殊に婦人に対して現代日本の真相と日本精神の眞髓とを純粋無色民間婦人の立場より膝つき合わせてお話申上げるため、婦人社会運動家としてまた女流評論家として絶大の信用を有せられる山田わか女史を御地に特派いたすことになりました、（以下略）（『日米新聞』1937年10月30日第3面）

これを読むと、当時の日本人が在外邦人に非常に友好的だと思えてくる。日本の領土が拡大し、それだけ外地に赴く者も増えるとあれば、だれもが移民を身近な機会と捉えることもあったかもしれない。しかし実際は、移民に対する本土の日本人の視線は、一般的にかなり冷たかったといえる。時代は下って1959年、日系人として初めてアメリカ下院議員に選出されて間もなかったダニエル・イノウエ—その後上院議員になり50年近く務めあげた米政治界

における重鎮でもある一が、当時日本の首相だった岸信介に、日系人を駐日大使にするよう提言してほしいと持ちかけたことがあった。しかし岸は、食えずに日本を出て行った移民に大使は務まらないという趣旨の発言をし、イノウエの提案を一蹴した、というのが未だに語り草になっている (Go 2014)⁽¹¹⁾。

さて、わか滞米中の日程は、地元日系新聞に詳細が告知されていると書いた。たとえば、11月1日の『日米新聞』には、次のような日程が紹介された (カッコ内説明および英語名は筆者による)。

- 11月1日 桑港 (サンフランシスコ) 婦人連盟主催 晩餐会
 - 同日夜 講演会「愛する我同胞に告ぐ」桑港寺ホール
 - 2日 サンノゼ San Jose
 - 3日 桑港明治会 講演
 - 4日 桑港女子教育座談会
 - 5日 王府 (オークランド Oakland) 講演会
 - 6日 ローダイ Lodi 講演会
 - 7、8、9日 北加 (カリフォルニア北部) 及び沿岸各地 講演
 - 10、11日 中加 (カリフォルニア中部) 方面
 - 13日 羅府 (ロサンゼルス) 着。2週間滞在
 - 29日 東行 (アメリカ東部)
 - 12月下旬 帰朝
- (『日米新聞』11月1日第1面)

この日程が報道されてから、『日米新聞』ではほぼ毎日、カリフォルニア各地のローカルニュース欄を中心に、わか滞米の様子を知らせる記事が続々と掲載されはじめる。たとえば、同じ『日米新聞』11月1日のローカル欄に、早速次のような告知が載る。

サンノゼ／綽々の女子評論家／山田女史講演会／教仏会堂で二日夜
(『日米新聞』1937年11月1日第6面)

オークランド／在留同胞の期待する／山田女史講演会／五日夜王府日
会主催（『日米新聞』1937年11月4日第9面）

上記11月7、8、9日のカリフォルニア北部における講演日程も4日後ま
では具体化し、見出しが次のように告知された。

メリスビル仏教会通信／山田女史を通じて日本の実情を聴く／仏婦主
催で七日の夜（『日米新聞』1937年11月5日第6面）

サクラメント／婦人運動の指導者／桜府で講演の山田女史／八日午後
八時より／仏教青年会館で（『日米新聞』1937年11月4日第6面）

スタクトン／女流評論家／山田女史講演会／仏教婦人会主催で／来る
九日朝日座で開催（『日米新聞』1937年11月2日第6面）

メリスビル Marysville は、沿岸のサンフランシスコから約 200 km で、ここ
からサクラメント Sacramento、さらにスタクトン Stockton までの移動とな
る。現在ならこれらの都市間は車で小一時間で行き来できるが、1937年当時
も車を使ったのだろうか。あるいは列車を使ったのかもしれない。

カリフォルニア中部における講演日程も、次のように決まる。

フレズノ／各婦人団体後援の山田わか子女史講演会／来る十二日（金
曜）の夜／リンカン小学公堂（『日米新聞』1937年11月6日第9面）

記事の中で、フレズノ Fresno が、カリフォルニア中部で唯一の講演会開催
場所になると報じられている。また、講演会の告知記事に続いて、夜の講演
の前に複数の婦人団体が主催する歓迎晩餐会の案内もある。わかには、どの都
市でも晩餐会に続いて講演会という組み合わせで迎えられた。

次に、講演会の様子を記した記事の見出しを、日付け順にいくつかあげてみる。

サンノゼ／山田女史の講演会／未曾有の盛会（『日米新聞』1937年11月5日第9面）

オークランド／山田わか子女史／講演会大盛会／空前の大観衆（『日米新聞』1937年11月7日第9面）

スタクトン／楼台に於ける／山田女史の講演／満場立錐の余地なし（『日米新聞』1937年11月10日第6面）

どの見出しも、講演会の大成功を報じている。このうちオークランドの講演についての記事は、会場の大混雑ぶりを次のように伝えている。

開会前に満員止むなく、会場委員は『各椅子を持つて前へ進めの号令』で身動きも出来ぬ迄のすし詰、立錐の余地なしと云ふ形容は当夜の光景と思はれた。会衆少く見積つて七百余王府にて催された近事の会合中最大の聴衆であつた（『日米新聞』1937年11月7日第9面）

さて、ここまでの新聞記事は、講演会の熱狂を伝える好意的なものばかりだが、わかんの来訪を報じた最初の記事を除いて、すべてローカルニュース欄での扱ひだった。しかし、11月9日には、第3面で次のようなニュースが着物姿のわかんの写真入りで大きくとりあげられる。

山田わか子女史に／ル大統領夫人／面会を快諾／十二月七日記者謁見日に／昨日本社に通達（『日米新聞』1937年11月9日第3面）

わかはサンフランシスコに到着後、まず日米新聞社社主、安孫子余奈子を訪ねる。余奈子は故・安孫子久太郎（1865-1936）の妻である。久太郎は20歳で渡米し、日米新聞の創業者としてだけでなく、日系移民を各地の鉄道、鉱山現場に人夫として送り込む請負業でも知られ、日系社会の名士として活躍

したが、わかがアメリカを再訪する前年の1936年に亡くなり、余奈子夫人が会社を引き継いだ。その余奈子を通じて、エリノア・ルーズベルト大統領夫人に面会を申し込んでいた。それが了承されたというビッグニュースである。この会見の詳細は『主婦之友』1938年2月号に「主婦之友遣米使節第三信」として掲載されたほか、日本の新聞も大きくとりあげた。

この『主婦之友』2月号のわか自身のレポートによれば、わかには遠方からの来客として、面会に訪れた女性記者など他の参加者たちの中でも一番いい席を与えられ、大統領夫人は部屋に現れるや、いの一番にわか握手を求めに来た。そして発言を許されたわかには、「日本の母も、支那の母も、苦しい思ひは一つである。……今、支那現地に於て、激烈を極めてゐる戦禍を一時も早く停止するために、東洋の母を代表して、私は大統領夫人を初め米国婦人の御協力を求めにまゐりました」(p. 88)と述べ、大統領夫人や他の聴衆の共感を呼んだという。こういうやりとりによって、日本の立場を伝えるという遣米婦人使節としての役割を、わかには十分に果たしたのだった。

さて、11月の前半は、カリフォルニア北部で講演の日程が組まれ、後半は、中部、南部と徐々に南下することになっていた。わか具体的な訪問日程を決めるにあたって、主婦之友社から依頼を受けた日米新聞社は、カリフォルニア北部は「婦人連盟」、南部は「南加婦人連盟」にそれぞれの地域の講演依頼申し込みに対応してもらうよう要請していた(『日米新聞』1937年11月5日第10面)。したがって、カリフォルニア中部から南部へ移動するあたりからは、ロサンゼルスを中心とする地域、南加(カリフォルニア南部)の婦人団体が中心となってわか日程を調整した。

カリフォルニア南部の講演スケジュールは、11月14日の紙面で紹介されている。11月13日のサンタバーバラ Santa Barbara から始まり、29日に東部に移動するまでの16日間で、休養はロサンゼルス入りする16日と、旅程を終える前日の27日だけである。カリフォルニア南部における講演会もすべて大入りだったが、特に次の記事を紹介しておく。

南加版／山田女史の／母子保護協会へ／講演に感激の会衆／即座に
二百余弗喜捨（『日米新聞』1937年11月21日第10面）

11月17日にロサンゼルスの大和ホールで行われた講演会に2000人以上が集まり、北米同胞女性会の会合としては新記録であること、母性保護連盟⁽¹²⁾への寄付が200ドル集まったことが報じられている。

わか は精力的に講演会・晩餐会をこなしていたが、超過密スケジュールがたたったのか、『日米新聞』12月2日第10面「南加版」によると、11月28日の慰霊塔除幕式に出席した日の晩、102度（摂氏38度9分）の高熱を出し、医者の手当てを受けた。しかし、記事によると、元来剛健であるのか、すぐに全快し、30日には予定どおり正午過ぎの列車に乗り、アメリカ東部に出発した、とある。

東部での訪問日程を終えてから再びカリフォルニアに戻ってきたわか は、その帰路、シカゴ、ユタ、ネブラスカ、デンバーなどでも婦人会の招聘を受け、講演をこなした。講演の演題に、ルーズベルト大統領夫人との面会についての報告が加わったことはもちろんである。

2度目の来訪となるカリフォルニアでは、その後、西北部（シアトル・ポーランド方面）に向かうわかの「送別会」が連日開かれた。次の記事はその例だが、さらに『主婦之友』友の会が作られたことも報じている。

山田わか女史／送別会盛会／各婦人会より多数出席／主婦の友会設立
（『日米新聞』1938年1月10日第10面）

この記事によれば、送別会を主催したのは『主婦之友』愛読者の有志で、今回、「主婦の友会」設立が提案され、わか が顧問に推薦された。「主婦の友会」はわか が委員長を務める母性保護連盟⁽¹³⁾を後援することを決定したということである。

わかのアメリカ訪問における最大の成果は、わかの母性保護思想とその活動に多くの賛同を得られたことであろう。冒頭で述べたが、わか は1935年か

ら「母を護るの会」で母子家庭の自立支援活動に取り組んでいた。この活動に対して、わかか帰国後も引き続きアメリカから援助金や贈呈品が送られ、それが幡ヶ谷の母子寮と保育園設立の基金になったのである。

年末はカリフォルニアで静養する予定だったわかかだが、結局休む間もなく講演会に忙殺されたと、1938年1月12日の『日米新聞』第10面は報じている。そして、1月15日、わかかは米大陸で最後の訪問地となるシアトルに旅立った。

まとめ

わかかが婦人使節としてアメリカに派遣された背景には、日本の周辺アジア諸国侵攻に対する国際世論の厳しい視線があった。そんな中で、わかかには特に「在米同胞」女性とアメリカ人女性に「純粋無色民間婦人の立場より」（『日米新聞』1937年10月30日第3面）日本の立場を釈明することが世間一般から期待された。わかかが、夫の事業を引き継いだ日米新聞社の女性社長・我孫子余奈子の助力を得て、エレノア・ルーズベルト大統領夫人との面談を実現したことは、わかかの婦人使節としての任務のハイライトであった。そして、わかかの訪問が、在米日本人社会に与えた影響も大きかった。

まず、地元日系新聞の報道ぶりから想像できるのは、各地の日系コミュニティがわかかに関する記事を通じて、互いのつながりを意識し合う機会を得ただろうということである。わかかはさまざまな場所に赴いたが、どこでも同じ話を繰り返したはずだ。したがって、彼女が何を言ったかということは、最初の記事を読めば十分だった。あとは、わかかがどこに行ったのか、そこでどう迎えられたのか―満員で立錫の余地もない、などといったこと―がわかればよかった。日系人読者は記事を通じて、日系人の住むどの場所でも、同じ感動が、同じ熱狂が沸き起こったことを知り、自分たちの共同体意識を確認し合えただろう。

当時の在米日系人、特に1世は、排日機運の高まる中で、自分たちが精神的な拠りどころとする本国のシンボルとしてわかかを受け入れた。とりわけ、わかかを迎える準備や晩餐会・講演会において婦人団体が果たした役割は大きい。「女性憧れのわかか女史」（『日米新聞』1937年11月14日第10面）のために、

日系女性たちは骨身を惜しまず奔走した。このようにして、講演会で記録的な聴衆を集めるわかのカリスマ性に人々は酔いしれ、自らの「移民ナショナリズム」を強化していったと考えられる。

しかし、それよりもフェミニズム運動の視点から見逃せないことがある。冒頭で、フェミニズム運動が軍国主義の強まる中で進展していったと記したが、なかでも戦前の婦人運動を、上野（1998：33）の分類にならって「分離型」の母性保護、「参加型」の婦人参政権とした時、わかかが進めていた「分離型」の母性保護運動は、女性がジェンダー区分にしたがって社会に貢献しやすい領域であり、それだけナショナリズムへも加担しやすかったと考えられる。在米同胞女性からすれば、女性が男性と同等に政治的活動に参加できる権利を求める「参加型」婦人運動は、故国を離れているが故、身近なものにはならなかったが、「分離型」の母性保護運動であれば、アメリカにいながらでも実践でき、また日本にいるわかの「母を護るの会」の自立支援にも寄付をするなどして積極的に協力できる。こういう形で、わかかの婦人使節としてのアメリカ訪問は、在米同胞女性による「分離型」婦人運動への「参加」をうながすことになったのではないだろうか。

第二次大戦後、公職追放により社長を退いた主婦之友社の石川武美、同じく政治活動を禁じられた市川房枝などとは異なり、公的制裁がわかかの身に及ぶことはなかったが、その評論活動はすっかりなりをひそめた。戦時中の言動に対する明確な「反省」の辞が見当たらないのは、わかか沈黙してしまったせいもあるかもしれない。しかし、林千代が「母性の主張が、エレン・ケイをしてナチスにつながったように、わかかもまた国家にとって都合のよい女性像を提供してしまったことも事実なのである」（林2007：10）と述べるように、わかかのアメリカ訪問も、日本の侵略行為について弁明する役割を担ったという意味で、軍国主義に加担したことは否定できない。そして「分離型」婦人運動による母性保護の思想と政策が発展したことも、当時の国家主義との親和性ゆえであったことには留意しなければならない。五味（1980：81）が「わかか本質的に愛国主義者」だが、夫・嘉吉は「漸進主義」で「広い国際的感覚を身につけている」と評したように、嘉吉没後、わかか方向性

を誤ってしまったのだろうか。

戦後のわかには家庭裁判所で離婚問題などの調停にあたり、また戦前に始めた社会事業に引き続きかかわっていく。婦人使節として渡米した際、在米同胞の女性たちから寄せられた善意の寄付を基に1939年に設立した「幡ヶ谷母子寮」と「幡ヶ谷保育園」が空襲で焼失してしまったのを機に、今度は「戦後処理緊急援護事業」（五味1980）として、1946年、婦人保護更生事業一売春業にかかわる女性を救済する施設運営一を始めるのである。斎藤（2014）が述べたように、社会事業の運営は、実質的には養子の民郎、実妹の加藤ひさ、孫の弥平治に委ねられたのだが、わか「分離型」の母性保護思想は、母子や女性を対象とした保護救済活動の中に生き続けている。

*今回使用した『日米新聞』は、カリフォルニア大学バークレー校図書館、『大北日報』はワシントン州立大学図書館、『アメリカ新聞』はカリフォルニア大学ロサンゼルス校図書館で収集した。なお、資料調査のため全米アジア学会（Association for Asian Studies）から北東アジア協議会助成金（Northeast Asia Council Grants）を受けたことをここに感謝して記します。

注

- (1) わかのアメリカ時代についての記述は、竹内（1994 [1929]）、山崎（1978）にみられる。
- (2) 斎藤（2014）が言及したように、わかには男性との醜聞があったせいで「女性相談」が打ち切りになったとの囲み記事が残っているが、真相は定かではない。しかし、わか自身がやめたのではないことは確かだろう。
- (3) わかが主婦之友社の新館の増設とともに開設された相談室で、週1回、相談者とじかに面談するようになるのは1938年の6月からであった。
- (4) 『主婦之友』目次の調査による。なお、大正期の同誌については、キーワードによるデータ検索が可能。
- (5) 『主婦之友』1933年1月号 pp. 243-246、同1934年10月号 pp. 112-120。ただし、2人の出会いのエピソードに、わか救済施設・キャメロンハウスにいたという件はない。
- (6) 『日米新聞』1937年10月30日第2面記事「米国関係者集り／山田わか女史社行会／

主婦の友特派婦人使節」の中に、「婦人代表の国民使節」「家庭代表の国民使節」などの語が見られる。このような呼び名がついたのは、わかが使節団の中で唯一の女性であったためと思われる。

- (7) 「国民使節」の明確な定義は不明だが、現役閣僚などの政府代表とは異なり、民間から国の代表として派遣された一団をさすものらしい。『主婦之友』1937年12月号では、わかが「太平洋上の国民使節大座談会」と題して、龍田丸に同乗した国民使節9人にインタビューをしている。その身分は遣伊国（イタリア）国民使節の大倉喜七郎・男爵、遣独国（ドイツ）国民使節の伍堂卓雄・前商相・海軍中尉、蘆田均・ジャパントイムズ社長などで、錚々たるメンバーであることがうかがわれる。
- (8) 石川については、『デジタル版 日本人名大辞典+Plus』および『世界大百科事典 第2版』の「石川武美」を参照した。
- (9) 最初のアメリカ集団移民がハワイとカリフォルニアで行われたのは1868年（明治元年）だった。その後1885年にハワイで「官約移民制度」が実施され、9年間で約3万人がプランテーション農場などの労働移民として渡航した。しかし、労働環境は厳しく、ハワイでの残留率は4割余りにとどまったという（柳田2012）。この場合は、出稼ぎというよりも永住をめざした移民であったと思われる。なお、「官約」とは、日本政府とハワイ政府の間の条約で取り決められたという意味で、官約制度が1894年に廃止されてからは、民間の「移民会社」が手数料を取り、移民募集や渡航手続きを行った。
- (10) 連載が掲載された『アメリカ新聞』は、UCLA 図書館の Special Collection の目録に記載されている。しかし、筆者が2015年2月に同図書館を訪れた際、連載記事の初回と最終回の掲載号は確認できなかった。なお、山崎（1978）によれば、1978年頃に『あめゆきさんの歌』の取材で UCLA 図書館を訪れた際、連載記事の全文が確認されている。
- (11) すずき（2012：17）によると、ダニエル・イノウエ同様、日系アメリカ人として初めてアメリカ政府閣僚となったノーマン・ミネタも、日本にいる親戚からですら、日系移民は食えないから日本を出て行ったんだと言われるとこぼしていたという。
- (12) 記事では「母子保護協会」とあるが、これはわかが委員長を務め、「母性保護法」

の制定を促進した「母性保護連盟」のことと思われるので、本文では「母性保護連盟」と記した。

(13) 前記同様、記事では「母子保護協会」とある。

参考文献

- 石川武美 (1980) 『石川武美全集 第6巻』財団法人石川文化事業財団
- 上野千鶴子 (1998) 『ナショナリズムとジェンダー』青土社
- 五味百合子 (1980) 「山田わか一人と歩み」『社会事業史研究』8 pp. 69-84 社会事業史研究会
- 斎藤理香 (2012) 「大正ロマンの生んだフェミニスト：山田わか・嘉吉の協働と思想(その3)」『ことば』33 pp. 121-139 現代日本語研究会
- 斎藤理香 (2014) 「大正ロマンの生んだフェミニスト：山田わか・嘉吉の協働と思想(その5)」『ことば』35 pp. 121-134 現代日本語研究会
- 主婦の友社編 (1967) 『主婦の友社の五十年』主婦の友社
- すずきじゅんいち (2012) 『1941日系アメリカ人と大和魂』文藝春秋
- 竹内幸次郎 (1994) [1929] 『米国西北部 日本移民史』雄松堂出版 [大北日報社]
- 林千代 (2007) 「解題」『山田わか著作集』学術出版会
- 柳田由紀子 (2012) 『二世兵士 激戦の記録 日系アメリカ人の第二次大戦』新潮新書
- 山崎朋子 (1978) 『あめゆきさんの歌：山田わかの数奇なる生涯』文藝春秋
- Go, Takamichi (2014). *Discover Nikkei* 「幻となった「日系人駐日大使」」
<http://www.discovernikkei.org/en/journal/2014/12/22/nikkeijin-chunichi-taishi/>
(2015.10.5)
- Ichioka, Yuji (2006). *Before Internment: Essays in Prewar Japanese American History*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- The Japanese American National Museum (2000). The International Nikkei Research Project. “Brief Historical Overview of Japanese Emigration, 1868–1998.”
<http://www.janm.org/projects/inrp/english/overview.htm> (2014.9.18)

(さいとう りか ウェスタン・ミシガン大学)